

ふるさとは今

ねずみ淵と亀淵【久利町】

石見銀山のとなり、久利町には南北に銀山川が流れていますが、その支流である戸蔵川には「亀淵」が、亀谷川には「ねずみ淵」があります。どちらも自然の力でできた淵で、非常に大きな岩盤から成り立っています。

50歳代より上の方は子どもの頃、夏になると魚捕りや水遊びによく行かれたそうです。しかし、水害



ねずみ淵



亀淵

などの影響や子どもたちだけで行っては危ないからと、だんだんと忘れ去られていました。竹が生い茂り流木が流れ着いたりして、かつてのように気楽に行ける場所ではなくなっていました。せっかくの自然が作った雄大で美しいこの淵をなんとか復元しようと、このたび地元自治会の有志の皆さんやボランティアの皆さんの手により、竹の伐採、流木の撤去、遊歩道や手すり、休憩小屋などが整備されました。

秋には紅葉や写生、ウォーキング、春や夏は滝からの涼しい冷気を楽しんでみませんか？

どちらの淵も道路沿いにあり車や自転車で来られてもすぐに見ることができます。今後も地元有志の皆さんが復元、整備作業を続けられる予定です。

ここへ行くには…

- 「ねずみ淵」 県道大田桜江線 亀谷口バス停より亀谷方面へ徒歩15分
 - 「亀淵」(休憩小屋があります) 県道大田桜江線 久屋小学校前バス停より広域農道を川合方面へ徒歩15分
- 詳しくは、久利まちづくりセンター ☎0854-82-5572



温泉津やきもの里

温泉津焼きの歴史に触れることのできる「やきもの里」には巨大な登り窯が保存修復され、今も春と秋の年2回、窯焚きが行われます。やきもの創作体験も可能(☎0855-65-4139)

有名で、これらの工場で製造された焼物は、西は福岡、東は京阪神、北陸、北は北海道まで出荷されていました。町外から働きに来る人も多く、当時の温泉津町の大きな産業の一つであったと言えます。

温泉津焼の歴史は古く、始まりは宝永年間(1704年～1709年)と言われており、最初は瓦の製造から始まり、丸物製造に移りました。昭和30年代後半頃からプラスチック製品が普及し始めるとともに需要は減り始め、工場も閉鎖していきました。現在では河井寛次郎氏の流れを汲む椿窯、宥椿窯、森山窯の3窯が温泉津焼の伝統に民芸の風を吹き込んだ作品を作っています。

表紙 あの頃～はんど作りの風景(昭和30年代初頃・温泉津町)～

表紙の写真は、かつて温泉津町松山にあった製陶場でのはんど(みずがめ水瓶)作りの様子です。土をこねる人、形を作っていく人と、作業の様子がよくわかります。

水道がまだ普及していない当時、井戸から汲んだ水をためて、顔を洗ったり、炊事に使ったりするはんどはどの家庭にもありました。昭和初期がはんど、壺、すり鉢、こね鉢、片口などの丸物(日用雑器)製造の最盛期で、温泉津町には工場が11軒ありました。耐火性が高く、高温で焼かれるので硬くて割れにくいという特徴のある温泉津焼(石見焼)は全国的にも

この情報誌は定住促進を目的に発行しています。

発行／大田市役所総務部まちづくり推進課 TEL：0854-82-1600 FAX：0854-82-5885

〒694-0064 島根県大田市大田町大田口1111番地 E-mail：o-matidukuri@iwamigin.jp <http://www.city.ohda.lg.jp/>

“おおだ”の定住サイト「どがどが」 <http://www.teiju-ohda.jp/>

どがどが 検索